News letter

噴火湾文化

【Funkawan Culture】

2017. 3 Vol.11

Date City Institute of Funkawan Culture
伊達市噴火湾文化研究所

●第11号目次

■講演要旨
【写　真】だて噴火湾縄文まつり公開シンポジウム
〈講　演〉「自然の声に耳を傾けるー写真家の視点ー」
写真家・大阪芸術大学 客員准教授　津田　直 氏・・・・・・3

■講演要旨
【博物館】だて歴史文化ミュージアムスタートアップ講演会
〈講　演〉「戦国大名伊達家の書籍蒐集と伏見政権の文化政策」
東北大学 名誉教授　磯部　彰 氏・・・・・・8

〈講　演〉「施設と都市をデザインすること」
室蘭工業大学くらし環境系領域 准教授　有村　幹治 氏・・・・・・13

表　紙
津田　直「Grassland Tears, Yagi B #1」
© Nao Tsuda, Courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film

講演要旨
【写　真】

だて噴火湾縄文まつり公開シンポジウム

〈基調講演〉「自然の声に耳を傾ける　―写真家の視点―」

写真家　津田　直 氏

1976年神戸生まれ。写真家・大阪芸術大学 客員准教授

1.「縄文」との距離

これまでランドスケープ、つまり風景をテーマにしたものを撮影してきました。

例えば、フィンランド北部からノルウェー北部にかけてトナカイ牧夫として生活している「サーメ」という人々の文化の中で、自然と人はどういう関係性で文化を受け継ぎ、暮らしを営んでいるのかを追いかけて一冊の本にまとめたり、または北アフリカのモロッコでは風と共に暮らしている砂漠の人々に密着して、「風と暮らすとはどういうことか」というテーマでシリーズとしてまとめてみたりと、日々、自分で見つけた視点を通して活動しています。

縄文まつりシンポジウムのフライヤー（クマのスプーン）

縄文との出会いについて話すと、僕自身は学者でもなければ、考古学を専門的に習ったわけでもないので、学術的なことを入口にしていったわけではないんです。

自然と人間の関係性をずっとテーマにしてきた中で、日本の場合、自然と人間の深い対話が成立していたのが縄文時代だろうという思いが直感的に僕の頭の中にありました。

それは、皆様から見ても、はるか 1,000 年という単位を幾つも超えた向こう側にある世界なので当然距離がある。もしくはどこまで私たちの方から歩み寄って縄文というものをつかむことができるのか、ある意味距離を感じてしまう世界であるとも思うのです。

でも、ちょっと角度を変えると、日本列島の長い歴史の中でどれだけ縄文という時間が長く横たわっていたかを思えば、距離は縮まるだろうと感じました。

国立科学博物館の篠田謙一先生が日本列島の人類の歴史について解説されたものによると、人類史４万年間を１年に例えたら、旧石器時代が８月のお盆くらいまで続き、縄文時代はお盆を過ぎた頃から始まり、12 月の１週目まで続いたといいます。

小学校の頃から縄文という言葉を耳にしても、正直このように捉えたことはなかったですね。それだけの長い時間だったんだと。ひとつ身近な物差しとして、縄文を初めてつかみかけた瞬間でした。

さらに、鎌倉時代の終わりが 12 月 25 日くらいで、

次の室町時代が始まり、明治は 12 月 31 日の0時から始まるといいます。これは一人の研究者の視点であり、一つの知識として僕に届いたわけです。

そこから何を感じられるか。ここ数年自然災害が頻繁に起きています。東日本大震災や熊本の震災、火山活動もそうですね。こういう国に暮らしながら、日々、将来・未来を考えていく中で、私たちが話していることは果たして十年単位で考えているのか、百年単位か、千年単位なのか、それによって見方が大きく変わると思うんですね。

もっというと、明治以降にできた基準で我々が明日を、未来を考えるのなら、先ほどのカレンダーでいうところの 12 月 31 日、つまり 24 時間で起こったことだけで、物事を決めてしまうということです。それでいいのかという大きな疑問が今日の想いとして一つあります。

そう思った時に、せめて縄文の中で何が起こったのかは、我々が知っておくべきだと。そこで得た知恵が私たちのこれからを決めていく大きなヒントになるのではないかと思ったことが、僕が縄文をより深く知りたいと思った理由の一つです。

2.「縄文」に惹かれた3つの理由

今日は僕が縄文世界に魅せられていった理由をお伝えした上で、実際に僕が試みている雑誌『PAPERSKY』の連載で縄文について書いたことをスライド投影しながら見ていきたいと思います。

縄文に惹かれた理由の一つは、1 万年以上も縄文の流れが途切れずに続いているということを肌で感じられるレベルで知ってみたいということ。

そして二つ目は、生と死、生きている世界と死者の世界に対する行いに縄文遺跡の中でかなり明確に見えてくる部分があること。私たちが死をどう捉えるかというヒントも縄文には数多くあり、生と死という視点で強く惹かれていったと思います。

そして三つ目は命に対しての敬意、死者に対しての「送り」や、敬意といったものが、身体だけを送るのではなく、そこにいた人の想いや思想が精神世界の中で吸収されていく中で、さらなる思想的なものが展開していたということが、死の世界の向こう側に見えるような気がしています。

この三つのことが縄文のことに惹かれていく理由になっていったといえます。

3. フィールドワークから見えてきたもの

6年前、秋田に住む友人に「縄文の時間と向き合ってみたいんだけど、どこから歩き始めたらよいだろうか」と話したことがあります。そこで秋田を訪ねて、畑でフィールドワークをしました。

歩き始めてすぐに自分の足元に土器片を見つけました。カメラを低く構えると、雪が溶けて土の自然の力で、ふっと土器片が表面に浮かび上がってくるような風景が見えました。このあたりに縄文の人たちが生活していたことは想像していたけれども、実際に目の前は「土器片と共に野菜が育つ」というような環境で、それが僕たちと縄文の時間というのはそんなに遠いところにないんだと感じさせました。

この連載では縄文人が立っていた場所に立って、そこから何が見えるかということを試みています。そして、時には実際に出土したものをガラスケースの中から出してもらい、直接触れて肌から感じ、僕の中で非常に惹かれたものや、見つかった時の状況の話などを写真と共に綴っています。

この『PAPERSKY』という雑誌は編集長が外国人で、読者は若い層も多いので、これからの将来を見つめるヒントがあるのではないかとの思いで「縄文フィールドワーク」という連載を担当しています。遺跡の有名・無名に関わらず、「縄文の欠片（かけら）」が各地にあると思うので、それを拾うようにして、学術的な難しい話よりはもっと我々の日常に近いところにあるものを掬いながら文章を書いて紹介しています。

例えば、反響があったものとしては、岩手の大船渡で縄文の集落跡を発掘調査しているところを撮影させてもらった回です。

東日本大震災では津波によって大船渡でも多くの人が亡くなられました。特に沿岸部の方です。ちょうど家が 20 数軒失われた場所があって、1 年経って家を高台に移転するという案が出たんですね。大船渡では標高 15m くらいの高台の林を切り開いていくと、縄文の遺跡が発見されました。

計画としては、これから生活するのに早く家を建てたいわけですね。でも縄文遺跡が出てしまったことで、発掘調査を行うことに首を傾げた方もたくさんいました。新聞にもそういう情報が載ったと思うんですが、僕はまったく違う見方をここではしていました。

高台の縄文遺跡には津波の形跡はなかったわけですね。つまり、もともと人はここに暮らしていて、例えば水産業とか色々な理由で海の近くに母屋を移して

いった時期があったんだと思うんです。そしてここは村ではなくなってしまった。

今回の津波をきっかけに高台にもう一度人々が戻ってきた時に、そこには長く生活した人々の形跡が残っていて、ここは安全な場所だと教えてくれているんですね。

でも家を失って待たれている方にとっては遺跡が見つかり、家を建てる計画がさらに引き延ばされ複雑な心境になったと思うのですが、これは伝え方次第だなと正直思いました。そして「この遺跡から見えてくること」について発掘している方々と話をして、許可を取って写真を撮りました。

写真家として各地にてフィールドワークを行い、縄文のかつての時間と今日を繋ぐきっかけになるシーンを拾いながらこれまで４年ほど連載してきました。

４．縄文時代に培われた思想の原点

４年前、新潮社の『芸術新潮』が縄文を特集した時、僕から哲学者で歴史学者でもある梅原猛さんに声をかけさせていただき対談を行いました。「縄文が世界を救う」と題して、森から学ぶことであったり、生と死の観念についてなど３時間くらい京都で対談しました。中にはアイヌ民族の話や、縄文を通して何を私たちは見るのかという話が出ました。

例えば森のリズム、つまり森の生と死についてです。僕から話したのは、大きな木が倒れた時に森で何が起こるかというと、空がぽっかりと空いて太陽光が今まで届かなかった小さな草木にまで差し込むようになって、その光を受けて最も小さな命というものが、その倒れた木の周りに生まれていくんだと。大木の栄養素までもがその森の次の命を育む一つの大きな力になっていくということ。

管理された森では倒れた木は危ないから撤去したりするかもしれないけれど、命の循環という意味では、実際にそれは退かしてはいけない「死」なのかもしれないとか。「大きな死があった時は、そこに次に待っている命が力をつける時なんだ」という話など。

縄文というテーマで始まった話でしたが、日本人の思想的背景としてある「森」であったり、死に対する儀礼のことだったりと、縄文時代に耕された思想の原点に話が及びました。

５．現代と縄文をつなぐ

雑誌連載を通して縄文歩きが続いていますが、昨年度にも現代と縄文をつなぐプロジェクトとして二つの展覧会を行いました。

一つは「青い森から、繋ぐ」という展覧会で、三内丸山遺跡で出土した通称「縄文ポシェット」をモチーフに現代版縄文ポシェットを作ったもので、老舗の鞄屋である「吉田カバン」と共働で行ったものです。

もう一つ、東京での展覧会「Grassland Tears（草むらの涙）」があります。

会場の中には壁の低い位置にも写真を点在させました。例えば、クマのスプーンはお墓の中から出てきたもので、子供のために贈られたのではないかといったような、僕が専門家から伺ったエピソードが展示のアイディアに繋がっています。

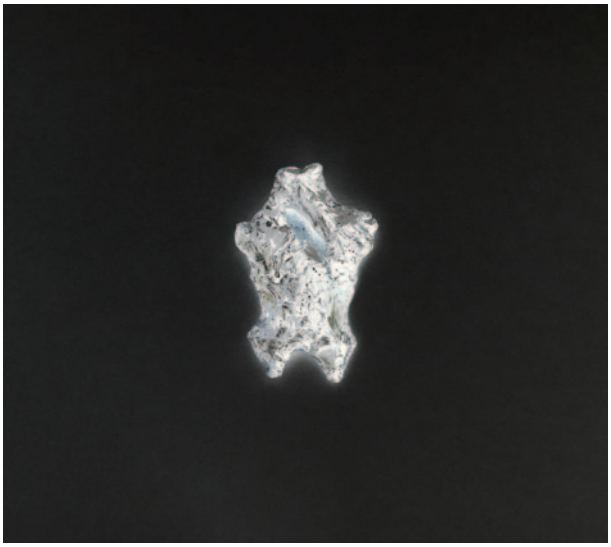
中でも、黒曜石を撮影したものは、あえて像の階調を反転させて（ネガ像として）発表しています。
つまり闇の部分は光、そして光の部分は闇になるという見え方となっています。（写真下）

なぜこのようなことをしたかというと、黒曜石は、天然ガラスですからもともとエネルギーの塊としてあったマグマの時には相当の光を放っていただろうと感じたので、あえて反転させました。

これらは縄文について伝えていくときに、本来縄文人が見ていたような視点を見出すことができないかという試みとして行いました。

また、注口土器（表紙）の場合においては左の方には男性のシンボルが見られ、隣り合って見つかったもう一つの土器の下部（写真次頁）には穴が開いており、女性の身体をモチーフにしていると思われたので、男と女という根底にあるテーマを引き出すために片方（女性）の土器の写真のみを反転させました。

色を調整したのではなく、普通に撮ったものを反転



Grassland Sun, Takasago #1

Grassland Sun, Yagi B #2

させたらこのように人肌のような色味となり、はっとさせられました。

写真家の仕事はあるものを記録するものと捉えられがちですが、僕が考えている写真というのは、縄文ポシェットでもそうでしたが、何かと何かを繋ぐために写真を表現の手段としてきました。

人と自然の関係性について写真を通じて結び直すことで、より本質が見えてはこないだろうか。消えかけた文化を写真が引き受けて次の世代に渡していくことができないだろうかということを思いながら写真を撮り続けています。

6.「もの」を「物語」としてみること

今まで僕にとって、縄文というのはとても大きな言葉でした。1万年という想像もつかない長さであったこと。縄文人といえば、現代人の誰一人として彼らと出会ったことがないということ。ただ、撮影が5年を過ぎた時に、縄文人という言葉ではなく、彼とか彼女という一人の人、向こう側にいる一人の人の存在を想うようになったんですね。

三内丸山遺跡で出土した縄文ポシェットの中にクルミが入っていて、携帯食だったのかわからないですけれど、それを腰につけていた人のことなどを考えて数週間過ぎていったり、男性と女性の器では、一つの家族のことを想像したり、彼という存在を想像したり、つまりは向こうに一人の人がいるんだということが、ものを見て感じるようになったのがこの1年間の大きな変化だと思います。

どこまで、僕と縄文の世界を縮められているかわからないですけれど、ものをものとしてみるのではなく、「もの」を「物語」としてみていくことが大切だと感じ始めています。

縄文・縄文時代・縄文人という大きな言葉ではなく、例えばそこに一人の子供の顔を想像したり、そこにいないけれども最後に触れていた人たちのことが見えない限りは、写真を通しての「繋ぐ」にはならないなと思って、ずっともがいてきました。

ただ、今は一人の人を感じ始めた以上、これは続けていこうと思いますし、発表していく中で、1万年の中にあった思想の欠片を、写真を通してなんとか形にできないかと思いやっています。

Q：落ち着いたトーンの写真が多いですね

もしかするとそれはスローシャッターのせいかもしれません。僕がものを見るとき、風景を撮るときでも言えることですけれども、写真を撮るということはどれだけそのものを見つめていたいか、そこにどれだけ時間を与えられるかということでもあるのです。

例えば、クマのスプーンの写真の場合、ライティングを組んだ光を使って、何百分の一秒で写すこともできてしまうんです。でもそれは実は一方通行なことで、そんな風に扱うべきものではないんじゃないのかと。「もの」と向き合うにはある程度それを眺めるのに時間が必要ではないか。僕にとっては、数十秒くらいかけて染み込むような撮影時間がないといけない対象だったんです。

風景を撮るときでも7分間必要だと思ったら7分間のシャッター速度から僕の作業は始まります。普通はそれでは写真は成立しないと思われるかもしれませんが、フィルムで写真術を学んだ僕にとって、弱い光の中でも十分にコントロールする方法がいくつもあるの

Taka Ishii Gallery Photography / Film 「Grassland Tears」 個展 展示風景

で、「目を瞑る」ように、内側に何か想いが積もっていくように写真を撮っていました。

Q：反転した土器の孔から漏れ出した光は命の輝きと捉えてよろしいですか？

これはあるアクシデントによるものですが、光の階調を反転しようと思い至ったきっかけになったものです。函館市縄文文化交流センターで貴重な資料を見せてもらい発掘当時の話などをうかがっているうちに、日が暮れてしまったんです。

日が沈む、わずかな青い光の中だけで撮影したので、出来上がりはほぼ真っ青な写真でした。ただ、そのネガ像を見た時にエピソードで聞いた「男と女」の世界がまさにそこにあったんです。

撮った時は青い光だけで、孔は真っ暗でほとんど目立っていませんでした。そう、孔の中は闇でしかないんですね。でもネガ像になった時に光がこぼれ落ちそうで、中にものすごく光が詰まっているというか、土器全体からはふくよかな女性の身体のようなラインも感じられて、中が十分に満たされているように見えた。これは本来そういうものだったんだというのが、反転した像であった時だけ見えてきた。

縄文ということを紐解く中で今日に結びつけるという話を何度かしましたが、やはりそこには思想的なこととか、縄文人の目の内に映っていた光景を想像し、できるだけ含みたいと思って撮っているので、アクシデントは結果的に一つのシリーズを制作していく上で大きな発見と兆しを感じさせてくれました

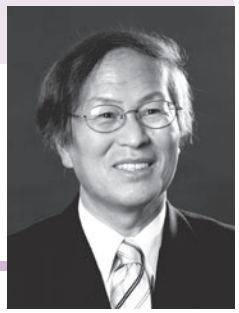
最後になりましたが、先程お話した「Grassland Tears（草むらの涙）」という写真作品のシリーズは出土した遺物と風景写真で構成しましたが、東京のギャラリーで展覧会を終えたいま、今後は海外での展覧会の準備を進めています。いつか一冊の写真集にもまとめたいと思っています。今後の展開を楽しみにしていてください。

協力：PAPERSKY
Taka Ishii Gallery Photography / Film
函館市縄文文化交流センター
入江・高砂貝塚館
助成：公益財団法人テルモ生命科学芸術財団

（第19回だて噴火湾縄文まつり公開シンポジウム　2016年8月27日）

講演要旨
【博物館】

〈講演〉「戦国大名伊達家の書籍蒐集と伏見政権の文化政策」
－伊達家の漢籍を中心に－



東北大学・名誉教授　磯 部　彰 氏

文学博士。専門は東アジア文化史・中国文学。

（1）武家と書籍蒐集（しゅうしゅう）

戦国大名らは、豊臣政権そして次の江戸幕府に組み込まれる中で、どのような書籍をいかなる目的のために蒐集したのでしょうか。仙台伊達本家を中心に実際の資料を紹介しつつ、その目的についてみていきます。時代は豊臣家が天下統一した伏見時代から江戸時代初期の寛永頃まで、つまり豊臣秀吉や徳川家康から徳川家光の時代で、ちょうど伊達政宗一代に該当します。

なぜ、蔵書やその内容が大名家や政治を研究するのに重要なのかを述べたあと、主に伊達家の漢籍（かんせき）を中心に江戸初期の和本までの蔵書から戦国大名の政治的立ち位置が分かる点を指摘します。最後に、戦国大名にとって蔵書、漢籍、とりわけ宋版（そうはん）と呼ばれる初期の出版物はいかなる意味を持っていたかをお話しし、本の蒐集は政治動向ともからむことから、伊達家など戦国大名の動きが、蔵書からも知ることができる点を指摘して話をまとめたいと思います。

（2）豊臣秀吉の公家化と伏見・大坂時代の文化政策

室町幕府が弱体化し、戦国大名が覇権を競うようになると、有力な武家は五山[※1]僧を軍師や参謀として招へいしたり、自分の家の子弟を入山させ、学問を修めさせたりしました。

当時、京都五山には、宋元時代の漢籍、もしくはそのリプリント版（五山版）が多く存在しました。しかし、戦国時代の武家にとって、五山僧とのつながりをもったとしても、まだそのルートから入手できた漢籍や五山版漢籍は少なく、わずかに所有する漢籍（戦争の方法論の書籍）と戦記（各武家の実戦記録書籍）を利用していたと思います。当時は戦国の世ですから、戦国大名は兵法書と応仁の乱以後の実戦記を見て実戦に使っていたらしく、すぐには役立たない儒教書籍などにあまり目を向けていなかったようです。

ところが、戦国末期になると、豊臣秀吉は天下を掌握する過程で朝廷に近づき、武家が公家に代わり関白となって天下を文武双方の力で治める、いわば新たな平家政権の確立を目指しました。そのため、武術一辺倒から文武両道の家柄を作る動きが出てきました。

もともと、豊臣秀吉や徳川家康は多くの大名を傘下に収めつつあった時から、書籍や印刷文化に関心を懐き、自分の勢力拡大に利用してきました。特に、秀吉は和歌に、家康は漢籍に注目したようにみえます。秀吉や家康らの戦国大名が、天皇家や摂関家らが朝廷で独占してきた文化事業に目を向けたのには、それなりの理由が考えられます。おそらく、古代より朝廷内では文化素養が求められ、それが大臣に任官する者の家格の証にもなったのでしょう。また、武家政治の手本である鎌倉幕府で北条氏や長井氏ら幕府の要人が文庫を構え、中国の政治を参考にして幕政に携わっていたことも頭にあったのでしょう。

豊臣秀吉が関白となって公家の頂点に行きつき、文化の掌握あるいはそれに関心を向けていたことを象徴する出来事があります。九州平定後の天正15（1587）年10月1日に開いた北野大茶会は関白太政大臣、朝鮮の役のさなかの文禄3（1594）年の吉

野山での花見は前関白（太閤）太政大臣、亡くなる年の慶長３（1598）年３月15日の醍醐の花見を太閤の名のもとで開催したことです。戦いは武家家臣団に任せて、人臣として位階をきわめた公卿（くぎょう）の秀吉は、文化事業を主宰していたのです。

豊臣秀吉が文化事業を進めていた時、甥の豊臣秀次も古典籍の収集をし、文化人を目指していました。

豊臣秀次が関東・東北に出陣した折、奥州藤原氏の中尊寺大蔵経、北条氏の金沢文庫本、上杉家に係わる足利学校本という武家ゆかりの写本や漢籍を奪いとって京で披露してから、天下人として文化を主催する者には、宋版などの漢籍が武家の棟梁（とうりょう）を代弁する飾りとなったようにみえます。京の公家らも、豊臣秀次のコレクションに注目していましたし、おそらく秀次と親しい伊達政宗にもその影響があったと思われます。

豊臣政権下、伏見・大坂時代、戦国大名家の家門が確定しつつあった時、大身の武家が和書とともに漢籍を蒐書（しゅうしょ）するのは、このような政治的背景があったからでしょう。特に、漢籍の中で最も古い宋代の印刷本である、通称「宋版本」と言われる書籍の持つ稀少性に注目するようにもなったのです。

(3) 伊達政宗の蒐書と漢籍群から見える動向

戦国大名家は、大きく分ければ、①鎌倉幕府の御家人が各地の地頭・守護となり土着して小領主となった武家、②室町幕府の守護大名や幕府奉公人の流れをくむ武家、③地域の小領主・土豪・野武士など戦国時代に新たに抬頭（たいとう）した武家、の三種類の出身からそれぞれ家門を興しました。

戦国を生き抜いた大小各大名は、豊臣政権のもとで、新たな序列化と封地の再分配を受けることになります。すると、相応の家門の由来を示す必要が出てきて、武力の他、財力、文化力が問われることになります。豊臣秀吉が武家のみならず、公家の頂点に立つと、武家とは違って伝統文化の保持者・継承者との位置づけを持つことになります。家臣団に組み込まれた全国の武士たちも、朝廷での序列化のために秀吉推挙によって官位を相応に得て、朝廷の貴族になります。その際、家名と系図、武家としての武具、知識ある古い家柄としての中国の学問を伝える漢籍、とりわけ鎌倉幕府を連想させる宋代出版の書籍が家門の由緒を物語るものとして熱望されることになります。

戦国大名は、五山の僧らを軍師や参謀として招へいしたり、子弟を寺院に入山させ、学問を修めさせたりしていましたから、その関係で、五山僧を軍師から政治顧問として採用する伏見時代前後ごろに宋元版漢籍を手にいれたようです。同時に、宋元版漢籍をリプリントした「五山版」の日本出版の書籍も手に入れたと思われます。

京都五山を中心とした多くの寺院は、今日の大学のような場所であり、図書館や大学出版社を持つ最高学府で、宋元版の漢籍や五山版がありました。今川家、浅野家、伊達家、毛利家、徳川家などの戦国大名は五山僧とのつながりがありましたから、宋元版を入手したルートの一つが京都五山と推測されます。

戦国大名らが書籍を蒐集する流れは、徳川家康の出版推進と文治主義が本格化する伏見時代に一層強まります。徳川家康は、いわゆる五大老として伏見に本拠を置いていたころから漢籍の蒐書と出版に力を入れ始めていました。家康は、亡くなる時まで書籍を集めて読み、そして出版させていました。京都の伏見に学校を作り、「伏見版」と呼ばれる本を出版させていましたので、伏見城下に集まった戦国大名も当然その影響を受けたと思います。

このような伏見・大坂時代の文化的社会背景があることが、戦国大名家が漢籍などの蒐集を行なう原動力になったと思われます。

次に本題である伊達家の蔵書、戦国大名の政宗に目を移しましょう。

現存する伊達家の蔵書目録は明治20（1887）年以降の作成であるため、いつ頃の蒐書で、何を大切にしていたかは断定しにくい状況にあります。おそらく

戊辰戦争の結果と関係するのでしょう。しかも、伊達家の蔵書は、かなり散佚しました。今日、亘理伊達家の蔵書は、伊達市と足利学校にかなり残っていて手がかりがありますが、他の伊達家一門の蔵書についてはよくわかりません。

伊達家の書籍蒐集を考える時、戦国大名の伊達家、つまり、政宗の蔵書がやはり極めて重要です。その特色を、特徴ある漢籍・和書から指摘するため、宋版本、五山版、古活字本、朝鮮本の順でそのいくつかをご紹介いします。

①宋版本

■酔翁談録

■真文忠公読書記

『酔翁談録』は、小説の筋書きのようなもので、宋代の講釈師のタネ本と言われています。今日では、元刊本としてみられていますが、かつて、明代の蔵書家の目録に、古写本が記録される珍本です。現在、天理図書館にあります。

『真文忠公読書記』は修理のために東京へ移したと記録されていますが、行方はわかりません。おそらく、2種の「宋版」は、伊達家でも特別なものであったでしょう。

宋版本　酔翁談録

②五山版

五山版は京都・鎌倉の五山の禅院で出版されたもので、鎌倉時代末から江戸時代初期まで出版されていました。五山僧らが中国の漢詩文、とりわけ宋代の詩文集を学ぶための本も多く、禅宗の語録、作詩字典などが中心です。今日では、次の4種が残ります。

■古今韻会挙要　16冊（応永5（1398）年刊）

■韻府羣玉　20冊（元統甲戌梅渓書院覆本）

■聯新事備詩学大成　10冊（至正乙未翠厳精舎覆本）

■杜工部詩集　6冊（戊申會文堂刊覆本）

五山版は伏見時代以前、あまり流通はしませんでしたが、京坂の地で印刷がされることが多かったので、買うにしろ贈与されるにしろ、上洛した当主、つまり政宗時代の蒐集ではないかと思います。

五山版　古今韻会挙要

五山版　韻府羣玉

③古活字本（伏見時代から江戸初期までに活字で出版した本）

■観世謡曲書　99冊

これは和書ですが、嵯峨本とか光悦本と呼ばれる王朝料紙風の紙に活字を組んで作った印刷本です。伏見時代の復古調にして社会の頂点に立った戦国大名の華やかな一面を窺わせ、能楽を武家儀礼に取り込む時代の産物で、政宗の蒐書と考えられます。あるいは、将軍綱吉の能楽好みに合わせた第5代藩主・伊達吉村の蒐書であったかもしれません。

■貞観政要（慶長5（1600）年）

一方、伏見の円光寺で徳川家康が、関ケ原の戦いのあった年に木活字で出版させたこの書には、後記に秀頼（幼君）に忠義を尽すと書いています。しかし、実

際は、徳川家康が唐太宗を借りて天下の指図をすることを宣言した出版物です。従って、伏見版と呼ばれたこの書は、徳川家康が豊臣恩顧の大名を含めて各戦国大名に配り、自分の陣営に誘った本であったと思われます。

④朝鮮本（朝鮮王朝時代の大型出版本で日本の印刷本の手本）

■春秋左伝詳節句解	儒教系
■六韜・三略直解等七書	兵法
■東坡先生詩	文学
■破閑集	朝鮮文人作品

これらの本は、一見して好みによる蒐集ではないように見えます。

文禄の役が始まった時、ソウル城内及び近郊の両班邸宅は進軍の早い日本武将の手に落ちたとも思われます。この時、小西行長や安国寺恵瓊、石田三成、浅野長政はソウルで指揮を取っていましたので、王宮や、政府高官らの宝物や書籍が残っていたならば、彼らが接収し、名護屋城へ戦利品として秀吉に献上したかもしれません。

一方、伊達家の朝鮮本は、政宗が出兵して得た戦利品と伝えられていましたが、果たしてそうでしょうか。たしかに、文禄の役で第二陣として渡海し、浅野幸長隊に参与して半島の南端の蔚山、そして晋州攻撃に加わり、わずか数ヶ月で九州に戻った後、浅野幸長とともに豊臣秀次謀反事件に連坐しています。晋州攻撃の主力浅野幸長の方が伊達政宗より多く戦利品を手にしたはずですが、現存本を見る限り、伊達家の方が朝鮮本は多く伝存します。また、浅野家、伊達家の朝鮮本は、いずれも文禄より古い刊本が多く、文禄慶長の役以後、半島には古い本は少なくなっていることを考えれば、江戸時代以降の購入はまずなかったと思われます。もし国内での本の移動があったとしたならば、それは、戦時の戦利品が考えられます。徳川家康や前田利家など朝鮮半島に渡海しなかった戦国大名が朝鮮本、とりわけ宣賜本（印章と下賜の文字がある本）と呼ばれる国王から大臣などに与えられる国家出版本を持つことは、それを持っていた大名から取り上げたことを窺わせます。それこそが、関ケ原の戦いでした。

おそらく、伊達家の朝鮮本は、浅野家と同様に、関ヶ原の戦いの後、徳川家康が西軍の大名から没収したものの一部を、恩賞として与えたものではないでしょうか。

⑤明刊本

■大明一統志

■山海関志

伊達家の漢籍には、明代の版本が多く、古いものは正徳年間以前のものがあります。その中でも、『大明一統志』『山海関志』は明朝の地理書です。朝鮮半島から明国への貿易を望む秀吉政権は、武力で進攻する結果となりました。朝鮮出兵を命じられた伊達政宗が、その指南書として文禄・慶長頃に蒐集したかもしれません。『山海関志』は浅野家も所有していますが、同じ頃の蒐書と思います。なお、伊達家には、政宗没後の清代の漢籍も多数ありますが、第２藩主・忠宗以降の蒐集です。

明刊本　大明一統志

⑥江戸和歌書

■後水尾院御製和歌集

■後水尾院様御添削之写

和書の中で注目すべきは、将軍徳川秀忠・家光と関係の深い後水尾天皇にかかわる朝廷との結びつきを示す写本を多く持つ点です。第３藩主・伊達綱宗は母方を通して、後西天皇といとこになるため、のちの寛文事件※2の背景が後水尾天皇に係わる和書からわかります。つまり、伊達家が和歌の本にかこつけて朝廷に接近し、徳川将軍家と対抗する勢力になろうとしていたと幕府にはみえたのかもしれません。それが、これらの写本の上から読めるのです。

伊達家、とりわけ政宗時代の蔵書構成を見ると、次のような点に気付きます。

①宋版本

五山僧を軍師とした可能性や豊臣秀吉に使えるために、上洛して入手したことが考えられます。武家の交流の際の調度品的存在でした。

②五山由来の旧刊本

宋刊本と同じように上洛の際手に入れたのでしょうが、こちらは、読むなどの利用を考えた色彩が強いと思われます。

③慶長・元和頃の古活字本

豊臣政権から徳川政権の移行時、京坂方面の上洛時の入手が考えられます。儒学書や、歴史書が出版の主なものですので、文治を見越した購入でしょう。

④朝鮮本

豊臣・徳川政権との関係を窺う最も良い書籍群で、伊達家が文禄の役や、関ケ原の戦いに行きつく軌跡を示すかもしれません。

⑤元刊本・明前期刊本

兵学・富国などのため、あるいは外国進出を前提とした国情を探るための書籍が中心で、当時の最先端の情報収集の現われです。

⑥和歌写本

朝廷との関係が窺え、寛文事件への伏線が分かります。伊達政宗は、ここで示した写本ができた時にはすでに亡くなっていました。

このように、伊達家の政治的動向の一端が、漢籍和書群から窺える点についてご理解いただけたでしょうか。

(4) まとめ
―戦国大名家の家門形成と宋版本の蒐集―

豊臣氏の全国平定が成ると、北山・東山文化の継承とばかり、豊臣秀次も典籍・古筆を蒐集したことから、更に書籍文化が広がって行きました。その象徴的出来事が、豊臣秀吉の茶会であり、歌会でした。つまり、文化的教養の裏付けが武将にも求められる時代となり、その裏付けに古書の蒐集が盛んになって行ったのです。

武具で身を固めた戦国大名は、家門の樹立のため、家系図を整え、系譜に相応した備えを始めました。その一つが、漢籍和書の蒐集でした。とりわけ、漢籍の中でも王者ともいうべき宋版本の蒐集は教養ある武家としてのたしなみであったように見えます。つまり、

宋版本はいかなる内容であってもかまわず、読む書籍というよりは名物としての書籍だったのです。茶器の名品を集めることは、一種の芸ごとの中かもしれませんが、宋版などの唐渡りの古書を備えるのは、「大明の士大夫（したいふ）」の心得に倣うものであったように見えます。おそらく、宋版は、武将が戦国大名から封建大名に変身する一つの神器であり、数ある典籍の中でも、その役割はまた別格であったのでしょう。

伊達家も、真徳秀（しんとくしゅう）文集（『真文忠公読書記』）と短編小説集（『酔翁談録』）の宋版２種をもっていましたが、封建社会の道徳の手本となった儒学書ではありませんでした。

江戸以前から身を興した武家にとっては、書籍は実用品ばかりではなく家門を示す飾りでもあり、名門としての系図・経歴をバックアップするための武門の「たしなみ」の一つでもありました。とりわけ、宋版の本は、当時流行していた能や謡曲、茶湯とは次元の異なる文化的象徴性の高いもので、それは、鎌倉幕府の北条氏が所有した宋版本の伝統にさかのぼり、幕府継承者としての地位も宋版本が代弁していたかもしれません。それゆえ、伊達家でも宋版本を持ち、尊重したのでしょう。

※1　寺格の高い禅宗（臨済宗）の寺院。

※2　一般に「伊達騒動」とも呼ばれる仙台藩のお家騒動。

（だて歴史文化ミュージアム スタートアップ講演会　2016年10月15日）

講演要旨【博物館】

〈講演〉「施設と都市をデザインすること」

室蘭工業大学くらし環境系領域・准教授　有村　幹治氏

博士（工学）。専門は都市・地域計画・交通計画など。
伊達市総合文化館検討委員会（副座長）

■はじめに

私は（仮称）伊達市総合文化館（正式名称「だて歴史文化ミュージアム」）の検討委員会と伊達市の都市計画審議会に参画させていただいています。その中で、自分の専門分野から、人口減少社会という問題を都市からしっかりと考え、福祉の役割や都市を創っていくときにどのような「場」づくりをしていくべきか、そして、その中で新しくできるミュージアムがどのように位置づけられるのか、ということをお話ししたいと思います。

■高齢化・人口減少社会と都市計画の課題

皆さんもご存知の通り、日本はアジアの中でもトップランナーで高齢化社会・人口減少社会が進んでいると言われています。こうした問題が、私たちが都市の中でしっかりと幸せに暮らしていけるかどうか考えていく上での大前提として存在しているわけです。

一時期話題になった増田寛也著『地方消滅』（中公新書）という本があります。その中で北海道が取り上げられていて、道内の事例が色々と書かれています。かなりセンセーショナルなタイトルの本ですが、悪いことばかりではなく、良いこととして、ニセコや興部・中標津のことが紹介されています。ニセコはみなさんご存知の通り、あれだけ外から人が流れ込んできて新しいことがどんどん出来てきています。ただ、こうした事例が他にも応用できるかというと、そうではありません。

国立社会保障・人口問題研究所のデータから人口変遷をみると、現在は札幌市だけが突出して人口が多いことがわかります。そして、道内全体として右肩下がりに人口減少が進むことが予想されています。伊達市には2014年の12月31日時点で35,551人住んでいますが、やはり人口減少が進むことが予想されます。この右肩下がりの角度は人口減少の速度感とも言えるのですが、これを考えながら、どうやって「交流人口」を増やしていくか、ネットワークをどうやって作っていくかというところを考えていかなければなりません。

都市計画に携わる側としての反省もあります。これまでは人口がどんどん増えていたので、市街地をどんどん拡大していきました。帯広の事例では、1960年代と比べて2000年代では市街地が拡大しましたが、拡大した市街地の人口が減少すると空家が次々に生まれてしまい、外見上は建物があるけれども実態は人が住んでいない「穴ボコ」だらけの市街地となってしまう恐れもあります。これをどうマネジメントするかということが、今の都市計画の課題となっています。さらに帯広では、建てられてから100年を超すような建物もあり、これらを建て替えていく必要が出てきます。このリノベーションをどうしていくか、というようなことを考えながら、街を活性化させていかなければならないということも課題の一つです。

■人と人とのつながり

モータリゼーション（自動車の大衆化）の功罪というものもあります。一人一人が車を使うと、街が車で溢れてスペースがなくってしまいます（渋滞の原因ともなります）。しかし、車の数を減らすと実は街中にはスペースがあるのです。今、世界的に自転車や公共交通のことをしっかりと考えようという流れになってきています。自転車や公共交通を充実させることで生まれるスペースを使って、例えばオープンカフェや出店をしてみましょうというように街の活性化案が出てきたりします。

また、人とかお金とか情報というのは、どこでも勝手に流れていく「動産」と考えられているのですが、人と人とのつながりというのは地域の中に根付いているものなので、動産ではなく「不動産」として捉えなければいけない地域の資産なのです。

人間関係というものは目には見えませんが、これがしっかりしている土地というのは、誰かが困っていたら誰かが手を差し伸べることのできる良い社会です。これがないと、「無縁社会」などと呼ばれて様々な問題が出てきます。豊かな「地域」というものが大事で、「地域」をどう育てるのかというところも大切な問題です。

人と人とのつながり。みなさんご家庭では親であったり、子であったり、私でしたら学生がいたりといろいろな関係性がありますが、人が減ってしまうと、単純に人が減るだけでなくて、そうした人と人との関係性も減ってしまうのです。関係性が減ってしまうと、今までうまくいっていたことが上手くいかないというようなことも出てくるでしょう。だから、この関係性をどう街の中で作り上げるのかを考えなければなりません。

人が減ったとしても、今まで知らなくて「他者」だった人が自分の友達の友達であるとか、さらには、「居るよ」ということがわかっているだけでも、街の中でネットワークがどんどん拡がっていって、「人と人とのつながり」のある豊かな暮らしができるのではないかということを、都市計画の分野では重要視しています。

これまでは、拡大や流動的といったことを考えながら、「とにかくモノを作ろう」ということでやってきたわけですが、これからは、ポスト・モータリゼーション（モータリゼーションからの脱却）にも目を向ける必要があります。車はもちろん便利なものですから否定はしませんが、それだけではなくて、いろいろなものを組み合わせて、生きている意味や人生の意味を充実させる社会を考えていきましょうということを提案しています。

こうしたパラダイム・シフト（価値観の転換）が進んでいます。ヨーロッパの都市では必ず広場があるのはどうしてだろうと考えてみると、そこに住んでいる人が他の街から来た人と広場で出会って、お互い知り合うということがすごく大事なのだとヤン・ゲールという著名な建築家も言っています。

■賑わう場をどう創るか

ここからは、街の中の「場」とは何だろう？ということを考えていきたいと思います。それは、賑わっている場所をどう創っていくのか、賑わうデザインをどう考えていくのかということに関わってきます。

映画『千と千尋の神隠し』の舞台のモデルとも言われている、台湾の九份（キュウフン）という街があります。こういうところに行くと気分が盛り上がるのはどうしてなのでしょうか。照明や看板が醸し出す雰囲気のせいなのかな？などいろいろ考えられるのですが、ここを実際に歩いてみると、実はお互いがお互いを見ることができるということに気がつきます。例えば、お店の中でお茶をしながら通りを歩いている人を見ていたりするのです。日本でも喫茶店やカフェに入って外を歩いている人を見る人間観察が趣味という人が時々いますが、あれにはやはり理由があるのだと思います。

また、新しいことをあえて古い街に入れ込んでみようということをヨーロッパの人たちは考えています。例えば、札幌市のように市電が走るフランスのモンペリエという街では、市電の外装を一般のアーティストに解放するということをしています。非常に古い都市なのですが、斬新なデザインの市電が走っている。日本だと苦情がくるかもしれませんが、こういうことが行われているのです。また、この市電は乗降口が低く設計されているので、車椅子の方でもスムーズに乗り降りすることができるようになっています。ヨーロッパで進んでいる「移動のシームレス化（継ぎ目のない

移動)」がまだまだ日本ではできていない状況があります。

また、ヨーロッパの街中では通りにテーブルを出しているレストランを多く目にしますが、日本ではこれもなかなかできません。「公道で勝手に商売するな」と怒られてしまいます。ですが、これはとても楽しいことです。道を歩いている人は「あ、なんだかいい匂いがする」「美味しそうな料理を食べているな」などと思い、料理を食べている人はまるで舞台に立っているような気分で、見られていることを意識するからオシャレをして街に出かけるわけです。

だて歴史文化ミュージアム完成予想図

日本では学生が「オシャレな服を買ってもそれを着てどこに行くの?」とか「オシャレをして歩ける(歩きたい)場所がない」と言っているのを聞いたりしますが、そうした状況は変えていかなければと思っています。

ヨーロッパの古い街では、通りに一枚のレッドカーペットを敷いて服飾の専門学生がファッションショーを開催し、それを市民に見てもらったり、カーディーラーがそのレッドカーペットの上に新車を置いてみたりということがありました。普段は建物の中でやっていることを、お客さんが来るのを待つだけでなく、こちらから街に出てやってみようということを街ぐるみで楽しんでいます。すると、こんなに人がいたのかなと思うくらい街に活気が溢れるのです。

先ほどのモータリゼーションに話を戻すと、車に乗った瞬間に性格が変わったようになる人がいます。車に乗ると相手の顔が見えなくなるので、クラクションやパッシングなどの尖ったコミュニケーションになってしまうのです。しかし、人間はもっと豊かな表現を持っているので、それが表に出てくるように変えていきたいと思っています。

フランスのリヨンでは、2000年に河川敷の駐車場を全部芝生に変えてその横に自転車専用道を作りました。渋滞の中を車で移動するよりも自転車の方が早いので、これまで車で通勤していた人たちが自転車を使うようになったりしています。もちろん車が全く必要ないというわけではありません。車を使わなければならない場所もありますが、ポイントを考えながら、人が集う場所に関しては、やはり人間を中心とした設計を考えていくことも大切です。

札幌でもアートスクールをあえて歩行者天国の屋外でやったことがあります。プライベートな閉じた空間でやっていたものをパブリック(公共)空間にもっていき、不特定多数の市民に参加してもらうような仕掛けです。

こうしたことは、その空間にいるお互いがお互いを知る、他者の存在を知るということにつながります。車で走っていて他者の顔が見えないのとは大きく違います。それだけで街のイメージというものが出てくるのです。このことは、だて歴史文化ミュージアムではどうしようか?ということを考える上でも大切になってきます。

■街の誇り

施設と都市をデザインすることは、街の誇りを表現することにもつながります。

例えば、先ほど紹介したフランスのリヨンの川沿いの自転車道の脇には、大理石の階段があり、対岸にある世界遺産の教会群をその階段に座って眺めることができます。さらに、ただ眺めるだけではなくて、12月になるとプロジェクションマッピングで教会が照らされて、それがよく見えるように階段の角度も調整されています。ここで重要なのは、このプロジェクショ

ンマッピングで、リヨンという街がなぜ成立したのかという、街の誇りを喚起させるような映像を 30 分間のプログラムで流しているということです。

ワインで有名なフランスのシャブリ地区の道路の脇に、ベンチがたった一つだけ置かれた場所があります。おそらく、このベンチを置いた人の意図は「ここに座って正面を見ろ」ということにあると思います。座って正面を向くと何が見えるかというと、教会なのです。その教会は、やはり街の成立と深い関係があり、昔は教会の鐘の音が聞こえる範囲が街の範囲だったのです。さらに、グラン・クリュ（ワインの特級畑）が一望のもとに見渡せる。そういう場所に、たった一つのベンチを置くことで街の誇りを表現してみせたのです。

■「場」としての「だて歴史文化ミュージアム」

最後に、だて歴史文化ミュージアムについて手短にではありますがお話ししたいと思います。だて歴史文化ミュージアムの中身について動線計画的にいうと、「展示室を１階にしろ」というご意見もありました。資料の保存・保管という観点もあって、展示室は２階にしているのでが、実は１階では伊達市の子供たちや市外からの修学旅行生、あるいは市民向けの体験や講座ができるスペースが取られているのです。そして、このスペースはあえてセミオープンにしています。完全に閉じてしまって、外から何をやっているかわからないというような場所ではなくて、近くを通ると「お、何か中でやっているな」という、これまで街中の事例で紹介してきたような仕掛けにしています。

■おわりに

最後に、だて歴史文化ミュージアムへの期待として、もちろん伊達の文化財を見せることが大事なのですが、それだけではなくて、噴火湾全体を視野に入れて欲しいと思います。特に北海道新幹線の開通によって北海道にやってきた人たちを、どうやって噴火湾側に引き込むかということを考えると、動線的につながるようなもの、例えば円空の観音像や旅行者イザベラ・バードなどの企画展をやるのもいいかもしれませんね。

素晴らしいミュージアムが出来ることを願っています。

（第２回スタートアップ講演会　2016 年１月 19 日）

伊達市の文化財が紹介された本・雑誌・TV・展示・Webサイト

■亘理伊達家資料

KKベストセラーズ　『歴史人』特集「独眼竜政宗の野望」.2016年6月.【政宗公御軍記】

ミュージアムスタイルカフェ　『旅鶴』夏号.2016年6月.【貝桶】

JR北海道　『THE JR Hokkaido』11月号.2016年11月.【成実公甲冑・不易流銃学鳥獣狙点之図】

福島県南相馬市　『原町市史』第1巻通史編Ⅰ.2016年12月.【奥州相馬氏野馬追図屏風】

浄土宗文化局　『浄土宗檀信徒宝典』2016年.【円空作聖観音像】

企画集団ぷりずむ　『ゆきのまち通信』169号.2017年3月.【雛人形】

第14回自動車エンジン国際会議（14th International Conference on Engines for Vehicles）ウェブサイト【成実公甲冑】

■北黄金貝塚

ユーキャン　『日本大地図』全3巻.2016年9月.

交通新聞社　『別冊旅の手帳青森・函館』2016年.

青森商工会議所　『かけはし』3月号.2017年3月.

NEXCO東日本　『北海道ドライブマップ2017春夏版』2017年3月.

NHK総合「北海道LOVEテレビ～北の縄文スペシャル～」.2016年10月21日放送【北黄金貝塚】

崎山貝塚縄文の森ミュージアム〔岩手県宮古市〕

「崎山貝塚～みやこの海と森の原点を探る」.2016年7月16日～9月19日【北黄金貝塚】

世界考古学会議第8回京都大会（8th World Archaeological Congress）ウェブサイト

■有珠モシリ遺跡

瀧音能之 監修『平成版 おとなの歴史 謎多き古代史をめぐる』2016年5月.笠倉出版社.【イモガイ製腕輪・クマのスプーン・銛頭】

卜箕大総 編　『東北アジア装飾古墳の研究』2016年6月.周留城出版, 韓国.【イモガイ製腕輪】

譽田亜紀子　『ときめく縄文図鑑』2016年12月. 山と渓谷社.【銛頭】

瀧音能之 監修　『最新学説で読み解く 日本の古代史』2017年2月.宝島社.【イモガイ製腕輪・クマのスプーン】

Newsletter【噴火湾文化】第11号

●編集・発行　伊達市噴火湾文化研究所
〒052-0031　伊達市館山町21番地5
TEL. 0142-21-5050　FAX. 0142-22-5445
E-mail　bunka@city.date.hokkaido.jp
URL　http://www.city.date.hokkaido.jp/funkawan/

●印刷　（有）共立印刷
〒052-0022　伊達市梅本町4番地4
TEL. 0142-23-2175　FAX. 0142-25-1971

2017 年 3 月31日発行